2021.3 / VOL.27

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA ニューズレター

展覧会レポート　文字模似言葉（もじもじことのは）

Topic of NO-MA　白い壁を乗り越えて
～「ちかくのまち」会場ボランティア活動より～

ABColumn　アール・ブリュットを巡るコラム VOL.17

地域インタビュー　あのひとの近江八幡スタイル
万吾樓　代表 髙嶋 正人 氏

展覧会レポート
Exhibition Report

文：山田創（本展担当学芸員）
写真：大西暢夫

2月にしては珍しいほど温暖で、春の気配さえ感じる日差しの中、企画展「文字模似言葉（もじもじことのは）」が幕を開けました。文字・言葉をテーマに、11名のアーティストによる表現を展示しています。身近なものであるはずの文字・言葉が、意表を突く形で発現し、琴線に触れ、認識を翻す――くらくらするほどの記号の応酬、知的な喜びに満ちた幸福なめまいが、この展覧会にはあると思います。ここでは紙面の都合上、4名の出展者の作品について、紹介したいと思います。

八巻清治《無題》
セロテープでぐるぐる巻きになった作品には、鈍い光沢がある。

清水ちはるさんの作品は、丸文字風のオリジナルな書体が印象的です。文字が紙の両面にぎっしりと書かれています。清水さんの作品からは、反復的に書かれた文字の、ビジュアルとしての凄みを感じることができるでしょう。

また、八巻清治さんの作品も清水さんの作品と類似するところがあり、彼もぎっしりと紙に文字を書いています。本展では、ぎっしりと文字を書いたメモ用紙を貼り合わせてできた立体作品をメインに展示しました。人知れず、一人自室で制作されたというその作品は、文字という抽象概念の集合でありつつ、モノとしての迫力も帯びています。

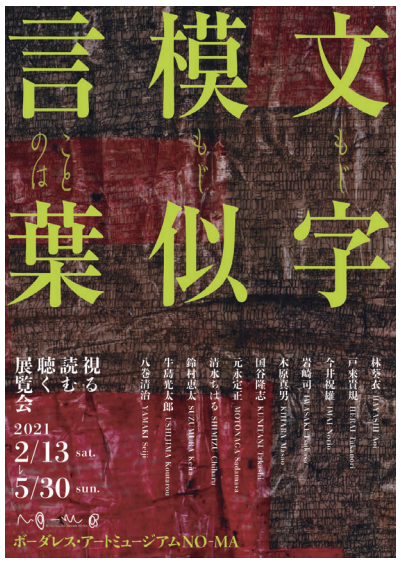
逆に形を持たない文字や言葉も、本展に登場します。会場に足を踏み入れると、どこからか人の声が流れていることに気づきます。これは、元永定正さんによる音声の作品です。元永さんは2006年に『ちんろろきしし』という、意味のない言葉と挿絵を組み合わせた絵本を上梓しています。会場に流れている音声作品は、この絵本の中に出てくる言葉を、作者本人が読み上げたものです。意味から解放された言葉たちは、リズムや音階といった音像として、鑑賞者に届きます。

同じく声を起点にしつつも、林葵衣さんは別角度から表現を行います。林さんの作品は、口紅を塗った唇を壁や窓、カンヴァスなどに口づけ、声を出しながら移動することで、口紅の痕跡を残す、《Phonation》というものです。声に出す言葉は目に見えたものや、聞こえた言葉など。会場に流れる元永さんの声を林さんが聞き取り、それを自身の作品の中で、痕跡として残すということも行われ、この展覧会ならではの思わぬ表現の交差となりました。

このように様々な切り口から、鑑賞者は文字・言葉との出会いを経験します。ホームページにて、展覧会の記録映像も公開予定であり、会場に来られない人にも、ぜひ、映像で本展を見ていただきたいと思っています。

※裏表紙に関連イベント情報掲載

林葵衣《Phonation —NO-MA—》
今回の作品には、白い口紅が用いられた。



文字模似言葉（もじもじことのは）
2021年2月13日（土）～5月30日（日）

【アート・ディレクター】今井祝雄　【出展者】林葵衣、戸来貴規、今井祝雄、岩崎司、木原真男、国谷隆志、元永定正、清水ちはる、鈴村恵太、牛島光太郎、八巻清治

主催：ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、社会福祉法人グロー～生きることが光になる～

後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会

協力：一般社団法人近江八幡観光物産協会、NPO法人しみんふくし滋賀、しあわせ作業所

ノマ Topic of NO-MA トピ

白い壁を乗り越えて
～「ちかくのまち」会場ボランティア活動より～

文・赤澤誉四郎（自立生活支援員）

空はどこまでも広く、青く澄み渡っているのに、目に見えない新型コロナウイルスが活動に影を落とす。屋外展示スペースであっても、マスクは必ず着用。定期的に換気、消毒作業を繰り返し、密にならないように配慮しながら、作品を紹介したり会場を案内。活動風景を収めようとカメラを向けても、顔の半分を覆い隠すマスクの存在が、せっかくの表情を消し去ってしまう。

「あのマスクの下には、来場者を温かくおもてなしする、とびきりの笑顔があるのにな…」

マスクが、活動を制限する白い壁のように感じられた。

ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭は3年目を迎えたプロジェクトだが、会場ボランティアとして地域の力を得て展覧会等を運営する取り組みは、2014年から続けられてきた。活動回数4回以上という方が多数存在する、地域に根差した活動だ。マニュアルにはチケットをもぎったり、作品を見回ったりといった“業務”が記されているが、それ以上に大切な役割として、来場者やサポーター同士の交流が期待されている。プロジェクトの目的にも「地域を舞台とした交流に新たなパターンを生み出す」と明記されている。

事前研修会のアンケートには、「この芸術祭を楽しみにしている皆さんに、『（私の）楽しい』気持ちを発信したい」「お客さまとの会話に期待しています」「新しい世界との出会いが楽しみ」「作品を学び伝えていきたい」といった言葉が並んでいた。

芸術祭が開催された期間は、比較的、新型コロナウイルスの感染拡大が抑えられていた時期であり、Go To トラベルなどの施策もあって、人が活発に動き出したところだった。「ソーシャル・ディスタンス」という言葉が繰り返されるなかで、来場者に話しかけることすらためらわれたサポーターもいたかもしれないが、次第に交流が活発になる様子が活動日誌からもうかがえた。

「子どもたちが『うぁ～、かかしさんや』と大変喜んで帰っていかれました」「鮒万里絵さんの絵を見て『忘れられない絵』と話していました」「5名の学生さんが谷澤さんの作品を見て、『次はもっとたくさん連れてきます』と話していました」

来場者の言葉が頻繁に記されるようになり、その言葉を引き出すために、積極的に作品の魅力を伝えている会場ボランティアの様子が浮かび上がった。会期終盤になると、書ききれないほどの言葉があふれ、ページが追加され、活動日誌そのものがにぎやかな交流の場となっていった。

改めて、活動風景にカメラを向けてみる。マスクからのぞく視線のなんと優しいことか。マスクからあふれ出る言葉の、なんと雄弁なことか。いつしか、白いマスクは壁ではなくなり、青く澄んだ空に溶け込んでいた。

アール・ブリュットを巡る
ABColumn コラム VOL.17

鈴村恵太さんの「展示」とアール・ブリュットの「展示」

文：横井悠（NO-MA主任学芸員）

これまでのABColumn（野間の間）は、NO-MAホームページ（no-ma.jp）のアーカイブからご覧いただけます。

企画展「文字模似言葉（もじもじことのは）」が始まった。本展では、文字や言葉が持つメッセージやエネルギーを伝えるアール・ブリュットや現代アーティストの作品が展示されている。今回の「ABColumn」では、本展の出展者の中から、鈴村恵太さんの「展示」に着目し、アール・ブリュットの作品の展示方法について考察したい。

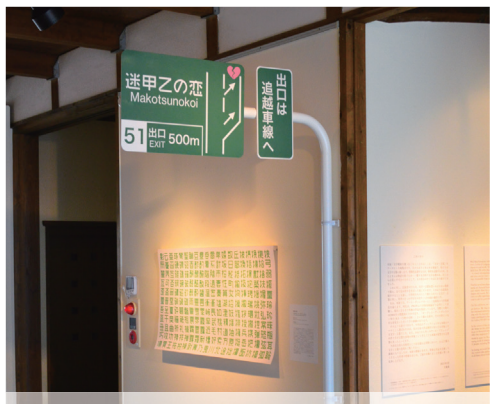
本展では、鈴村さん自作のフォントが羅列された印刷物と、高速道路の標識を模した看板が作品として展示されている。この展示は、作品の制作から展示に至るまでのプロセスが興味深い。鈴村さんとNO-MA学芸員の山田、そして鈴村さんが通う就労継続支援事業所の町田施設長の三者で展示の打ち合わせをしていた時、鈴村さんは「本当は作っているフォントを使って看板を作りたい」と漏らしたそうだ。山田学芸員は「鈴村さんの制作に接することができる」と考え、展覧会のアート・ディレクターである今井祝雄さんに相談した上で、看板を制作して展示することを鈴村さんに提案。当初、鈴村さんはこの提案に対し慎重であったが、熟慮の末、看板を作ることを決断した。

制作にあたり、鈴村さんは作品の大元となるデザインを手掛けた。また、山田学芸員は看板の設計や施工方法などを業者と調整し、町田施設長は、鈴村さんと山田学芸員とのコミュニケーションが円滑に進むようサポートしてくれた。看板制作のためのプロジェクトチームのような体制が生まれ、三者が都度、状況を共有しながら展示は少しずつ形になっていった。

本展で鈴村さんは作品制作に加えて、展示にも関わったが、「アール・ブリュット展」の展示を見渡すと、作者が展示に関わるというのは珍しい。アール・ブリュットの作者は、とりわけ制作することそのものに重きを置くことが多い。その反面、作ったものを他者に見られることに執着せず、また、展示の意向確認を経ることができない場合もある。そのことから、多くの場合、学芸員など展覧会の企画に携わる者によって考えられるが、仮に自分の意思で判断ができる作者であっても、一律に展示の意向を確認しないまま、学芸員によって展示が考えられる傾向にある。そのため、アール・ブリュット展示の多くでは、しばしば学芸員がある程度自分の裁量で展示できてしまう状況が生まれがちだ。もちろん展示を考える時、学芸員は制作現場を訪ねてその様子を調査したり、家族や支援者など周囲の人々の意見を参照したりするだろう。しかしながら、この状況は、万が一、展示の上で飛躍した解釈、誤解を招くようなことが起きたとしても、作者の意思確認を経ていない以上、その誤解に気付けないままとなり、修正できない可能性を孕んでいる。

その点、今回の鈴村さんの展示では、学芸員の裁量のみに委ねられる状況を回避できている。山田学芸員や町田施設長が鈴村さんに助言することはあっても、最終的な決定は鈴村さん自身によって行われた。展示に至るプロセスで、仮に誤った判断があったとしても、より適切な展示に修正できる可能性が高くなったとも言える。また、「看板を立てる」という発想が仮に学芸員から生まれたとしても、作品に介入し過ぎているとしてなかなか実現には至らないだろう。つまり、今回の展示は作者である鈴村さんが関わり、かつ三者のチームとしてのバランスが合致したことで、展示自体のクオリティが底上げされている。今回の鈴村さんの展示事例は、アール・ブリュットの展示に関わることが多い筆者にとって興味深いものとなった。

（次号に続く）



鈴村恵太さんの作品の展示風景

NO-MAで展示のシミュレーションをしている様子
左から、山田学芸員、鈴村さん、町田施設長

あのひとの近江八幡スタイル

地域インタビュー
ohmi-hachiman local interview

地域に根ざした和菓子屋として、安土の歴史とともに和菓子の魅力を伝える

万吾楼 代表 髙嶋正人氏

文：佐倉武（主任自立生活支援員）

上 / 安土の歴史と和菓子の魅力を語る髙嶋正人さん
下 / 信長の愛刀の鍔をなぞらえた2色餡入りの最中「まけずの鍔」

織田信長の銅像があるJR安土駅前に、堂々とした佇まいをみせる和菓子屋「万吾楼」。明治43年（1910年）創業の４代続く老舗です。近くに小学校があり、賑やかな通りに面していて、地元の人や観光客に親しまれるお店です。「安土の歴史とともに和菓子を味わってほしい」と語る代表の髙嶋正人さん。

万吾楼の看板商品は、織田信長ゆかりの和菓子「まけずの鍔」。２色餡入りの香ばしい最中で、2代目の万三郎さんが信長の愛刀の鍔を模した、この地にふさわしいお土産として考案されたそうです。お客さんに「まけずの鍔（つば）」の由来を話したところ、縁起物として、合格祈願や野球や剣道などのスポーツ大会の勝利祈願として口コミで広がったとのこと。

「まけずの鍔」にも使われている餡は、鈴鹿山系の湧水に恵まれた安土という地の利を生かし、その地下水でふっくら炊き上げた小豆から作られているお店自慢の自家製餡です。また、織田信長ゆかりの地としての印象が強い安土ですが、髙嶋さんは「織田信長だけでなく、戦国武将佐々木氏や西国三十三所の一つである繖山（きぬがさやま） 観音正寺など歴史的な逸話や建造物が残っています。安土は自然や歴史的な魅力がたくさんあります」と語ります。

髙嶋さんは、店頭でのお客さんとの会話も大切にされています。「どんなことに使いますか？」と尋ね、それぞれの場面に合った和菓子を紹介します。「地元の人や観光客と和菓子を通じてつながり、お客さんから感想を聞けることが楽しみ」とのこと。和菓子だけでなく、洋菓子作りも学んだ髙嶋さんは、お客さんのニーズに対応できるように、種類を増やし続けています。洋菓子作りの技術と融合した和菓子もあり、中でも人気は、季節の素材を使った10種類ほどのオリジナル大福です。また、昨年の新作「くずキューブ」は、溶けない氷菓子です。葛のゼリーにパイナップルやみかんを入れて冷やして固めた、ひんやりモチモチとした夏のお菓子です。

万吾楼とNO-MAとのつながりは、2020年秋に開催した芸術祭「ちかくのまち」の一環として実施した、点字や音声メニューなどの「バリアフリーメニュー」の設置がきっかけです。万吾楼にも障害がある人が来店されるということで、今回のバリアフリーメニューの設置協力をお申し出くださったそうです。

「安土の歴史とともに和菓子を味わえるお店として、これからも新しい商品、ジャンルにチャレンジしていきます」と語る髙嶋さん。髙嶋さんは、和菓子と洋菓子を技術とアイデアでつなぎ、そのお菓子で人と町と歴史をつないでいます。

JR安土駅前にある和菓子店「万吾楼」

「万吾楼」の店内
たくさんの和菓子が並ぶショーケース

野間の間
noma-noma vol.27
2021年3月 発行：社会福祉法人 グロー 法人本部企画事業部 TEL 0748-46-8100 FAX 0748-46-8228 デザイン：株式会社タケコマイ

「ちかくのまち」映像公開

NO-MAのYouTubeチャンネルでは、2020年秋開催の「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭 ちかくのまち」関連映像を現在公開しています。

会場映像

感覚を刺激する10組の魅力的なアーティストの作品と、町の景色や音を、“ちかくのまち”をめぐるように、ゆるりとお楽しみください。

パフォーマンスプログラム

出展者の福留麻里さんと武友義樹さんのコラボレーションから生まれた作品です。NO-MAでの展示に加え、西之湖園地を巡る形でパフォーマンスが行われました。

企画展「文字模似言葉（もじもじことのは）」関連イベント情報

近江八幡文字模似(もじもじ)ツアー

文字をテーマに近江八幡地域の魅力とNO-MAをつなげるプログラム。各回二部構成で、第一部に本展担当学芸員のレクチャーを交えた展覧会鑑賞、第二部に近江八幡旧市街でカフェのあるハンコ屋さん「江湖庵」を営む書家の齊藤江湖さんによる“書”のワークショップを実施します。

2021年3月20(土)日 1回目**13:00〜** 2回目**15:30〜**

会場：第一部 **NO-MA**（近江八幡市永原町上16）
第二部 **旧伴家住宅**（近江八幡市新町3-15）

定員：各回**5名（要予約）**

参加費：**観覧料のみ**

創作体験「もじ〜る。」

文字を題材にして立体作品をつくります。簡単な作業で不思議なかたちが生まれる、子どもから大人まで楽しめるワークショップです。

※小学生以上を対象とした創作体験です。

2021年4月24(土)日 13:30〜15:00

会場：**酒游舘**（滋賀県近江八幡市仲屋町中６）

定員：**15名（要予約）**

講師：**倉科勇三** 園田学園女子大学 短期大学部 幼児教育学科 教授

参加費：**観覧料のみ**

イベントのご予約／お問い合わせは、NO-MA（連絡先はページ下部）まで。

<NO-MAグッズのご案内>

アール・ブリュット作品のメモ帳やトートバッグなど、NO-MAのミュージアムショップやホームページからお買い求めいただけます。

<NO-MA企画展グッズのご案内>

開催中の展覧会「文字模似言葉」（～2021年5月30日（日））のカタログやポストカードを販売しています。

<NO-MAのアーカイブと情報発信>

2004年の開館から今日まで、NO-MAでは、展覧会の開催をはじめ、海外機関との連携や地域との交流、障害当事者と共働した作品鑑賞プログラムの開発など、様々な取り組みを行ってきました。こうした取り組みの中で出会った人々の声や、出来事の記録――それらは原稿、写真、動画、画像、音声などといった形をとり、情報として私たちの元に蓄積しています。

こうした大切な情報資産を活用するためのプラットフォーム「NO-MAアーカイブ」の公開に向けて準備を進めています。まずは、20本程度の記事をピックアップして3月末にNO-MAホームページで公開します。ご関心のある方はぜひご確認ください。

NO-MAホームページ
https://www.no-ma.jp/

公式Facebook
museumnoma

NO-MAの公式Facebookでは企画展の様子やNO-MAで出展いただいている作家の情報など、NO-MAや障害者の文化芸術に関わる情報を掲載しています。ホームページとあわせて、ご覧ください。

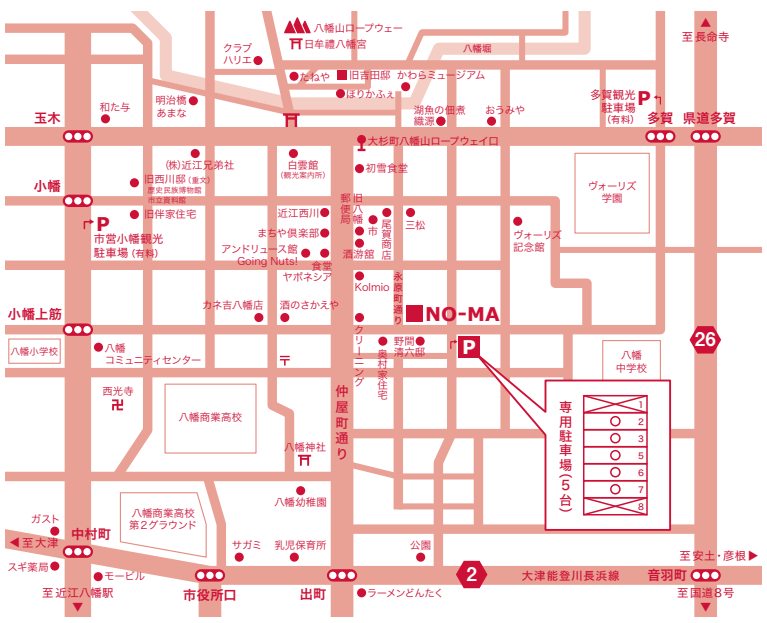
【編集後記】

「よく通る道」というものがある。それは通勤通学のために通る道であったり、犬の散歩のときに通る道であったり、はたまた特段目的もなく彷徨う道であるかもしれない。いずれにせよひと時の邂逅を前提としているものである。

そしてそういう「道」には、「よく会う人」や「よく見る建物」、「よく嗅ぐ匂い」などが付随している。これらは「道」と同様、ひと時の邂逅を前提としているものなので、「なんとなく知ってはいるけれど、実はよく知らない」という性質を持つ。駅のホームで見かけるあの人は大抵本を読んでいるが、何の本なのかは分からない。あの木造建築の建物は相当古そうだが、そもそもどういう目的で建てられたものなのだろうか。という具合で、どこかミステリアスな部分というものを併せ持っている。それらは生活の中に転がっている謎であり、気付かず通り過ぎることもできるが、探そうとすればいくらでも見えてくる。

こうしたほんのささいな謎は、解決することで生活を少しだけ豊かにすることもあるだろう。また謎のまま転がしておくことで、身の周りに小さな可能性をたくさん保持しておくこともできる。いずれにせよ、「道」にはそうした謎が無数に存在している。それはきっと素敵なことである。（編集担当 大槻拓矢）

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA
Borderless Art Museum NO-MA
滋賀県近江八幡市永原町上16
TEL/FAX 0748-36-5018
休館日：月曜日
（月曜日が祝日の場合は翌平日休館）
E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp
http://www.no-ma.jp



Access アクセス

バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス（長命寺行き）大杉町八幡山ロープウェイ口バス停下車徒歩8分

車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。
国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。（計30分）